Study abroad and motivation to learn a second language: Exploring the possibility of the L2 Motivational Self System

植木美千子

論文要旨（概要）

本論文では、日本人大学生英語学習者を対象として、まず (1) Dörnyei (2005, 2009) らが提唱する *The L2 Motivational Self System*（以後、L2 MSS）の枠組みを、先行研究などの知見にもとづき拡張し、(2) この拡張版 L2 MSS の妥当性を統計的に検証していく。その後、拡張版 L2 MSS の枠組みの下で、(3) 海外留学（Study Abroad：以後 SA）プログラムの影響を、情意面（L2 動機、L2 不安、自己効力感などや、それら相互の関係性）の変化に着目して、量的研究手法を用いて探っていく。これに加えて、本研究では、 (4) SA によってもたらされた情意面における変化の背後にあるプロセスについても、質的研究手法を用いて記述していく。最後に、得られた知見をもとにして、(5) 研究面および教育面において、いくつかの提案を行う。本論文は、4 つの実証的研究を含む、全 7 章から構成されている。

第 1 章では、今回の研究を始めるに至った社会的背景、理論的背景について概観したのち、本論文の概要について解説する。

第 2 章では、本論文のテーマである、SA と L2 MSS に関する文献レビューを行う。文献レビューの結果として、SA における情意面の研究は比較的限られており、self を取り扱ったような研究も緒についたばかりであることが指摘される。筆者は、次に、SA において学習者の情意面での変化を本格的に研究するには、L2 MSS の枠組みが有望であると考え、この枠組みの構成要素と仕組みについて詳述する。加えて、L2 MSS において、どのような研究の方向性と拡張可能性が考えられるかにつても、詳しく検討する。

第 3 章では、SA 研究により適した枠組みへと L2 MSS を拡張していくことが可能かどうかについて、パイロット的に検証した研究 (Study 1) を報告する。本研究では、(1) 理想 L2 自己 (*the ideal L2 self*) に 2 層を設けること、つまりマクロとミクロの理想自己を設けることで、より説明力の高い枠組みが提案できるのか、(2) 「理想自己に関連する情報量の多寡」という概念を導入することで、（より明瞭な）理想 L2 自己形成の過程が説明できるのか、および (3) L2 動機づ

けだけではなく、L2 不安や自己効力感と理想 L2 自己との関係性についても、今回の枠組みの中で統合的に説明できるのか、を検証することが目的となった。共分散構造分析 (SEM) を使用した検証の結果、(a) 理想 L2 自己に 2 層を設けることで妥当性の高いモデルが得られること、(b) 情報量の多寡が理想 L2 自己の明瞭性と関係すること、および (c) 理想 L2 自己との関係性で、L2 動機づけや L2 不安、自己効力感などを論じることが可能であるということなどが判明した。また、この研究では、(d) マクロな理想 L2 自己に働きかけることで L2 動機が高められる可能性があること、および (e) ミクロな理想 L2 自己に働きかけることで L2 不安が軽減できる可能性があること、なども明らかになった。

第 4 章では、Study 1 の結果を受けて、義務 L2 自己（*the ought-to L2 self*）や L2 学習経験（*the L2 learning experience*）という L2 MSS の他の重要な構成要素も含んだ、いわばフルシステムの枠組みの下で、(1) 理想 L2 自己にマクロとミクロの層を設けることでより説明力の高い枠組みが提案できるのか、(2) 「理想自己に関連する情報量の多寡」という概念を導入することで、より明瞭な理想 L2 自己形成の過程が説明できるのか、および (3) L2 動機づけだけではなく、L2 不安や自己効力感と理想 L2 自己・義務 L2 自己・L2 学習経験との関係性についても、拡張版の L2MSS の中で統合的に説明できるのか、を検証した (Study 2)。共分散構造分析 (SEM) を用いた検証の結果、(a) 理想 L2 自己に 2 層を設けることで妥当性の高いモデルが得られること、(b) 情報量の多寡が理想 L2 自己の明瞭性と関係すること、および (c) L2 動機づけだけではなく、L2 不安や自己効力感と理想 L2 自己・義務 L2 自己・L2 学習経験との関係性についても、拡張版の L2MSS の中で統合的に説明できることなどがわかった。また、この研究では、(d) 日本人英語学習者の場合、義務 L2 自己よりも、理想 L2 自己と L2 学習動機がより関連していること、(e) 他者（親や仲間）の影響が義務 L2 自己を介して L2 不安を形成し、L2 動機づけに悪影響を与えていること、なども明らかになった。

第 5 章では、上述の 2 章（第 3 章、第 4 章）の結果をもとに提案された拡張版 L2 MSS の枠組みを用いて、学習者の情意面への SA の影響について検証を試みた (Study 3)。本研究では、英検準 1 級用の Can-do List を用いて、英語力の変化についても調べることとした。質問紙と Can-do List は SA 前と SA 後に 2 回にわたり実施された。分析は、多母集団共分散構造分析 (*multi-group SEM)* を用いておこなった。結果として、SA 後は (a) L2 不安が有意に低下し、(b) L2 動機

づけと英語能力の間により強い関係性が見いだされ、(c) 義務 L2 自己の L2 不安への影響も有意に低下し、(d) 理想 L2 自己、自己効力感、L2 学習態度（*L2 learning attitude*）に加えて義務 L2 自己までが、L2 学習動機を有意に支える構図が明らかとなった。筆者は、この (d) に関してさらに考察を行い、「動機づけの堅牢性」(*robustness of L2 motivation*) という概念を提唱し、SA により、動機を支える 1 つひとつの情意要因の影響がより強化されるだけではなく、動機を支える情意要因の数までが増えていき、その結果、L2 学習へのより強い動機づけが得られるのではないか、と主張している。

Study 3 では、確かに動機づけを支える要素間の関係性の変化については記述できたが、この変化が、「どのようにして」、そして「なぜ」生じるのかという問題までは踏み込めないままであった。そこで、第 6 章では、質的研究手法を用いて、この問題に取り組むことにした (Study 4)。分析の焦点を Study 3 で（L2 動機づけへの）影響の顕著な変化が認められた (1) 義務 L2 自己、(2) 自己効力感、そして (3) L2 不安に絞り、変化のプロセスを記述する事例（エピソード）を抽出し、解釈を行った。結果として、 (a) SA を経て、義務 L2 自己がどのように理想 L2 自己に近い形に変化し、L2 動機を支えるに至ったのか、(b) 自己効力感の内容がどのように変化し、そのため、L2 動機づけへの影響力が SA 後に増したのか、そして (c) SA 後に、どのように L2 不安が軽減し、動機づけへの負の影響が弱まったのか、という３つの個別プロセスの詳細が提示された。

本論文の最終章である第 7 章では、研究における限界点についての言及があり、今後の研究での改善方策も提示される。これに続いて、本論文の締めくくりとして、今後の研究の方向性と教育面での示唆が述べられる。研究の方向性としては、(1) 情意面での研究では要因を個別に取り扱うのではなく、相互の関連性をベースに、self の概念などを入れながら統合的に記述することが大切であるということ、および、 (2) 量的研究手法と質的研究手法を組み合わせることにより、事象の変化の記述と、その背後にあるプロセスの解明が可能なること、の２点が強調されている。後者については、４つの研究を通して、(a) L2 動機を高めるための働きかけや L2 不安を軽減させる方法についての知見が得られたこと、(b)より鮮明な理想 L2 自己のイメージ形成のための方法についての知見が得られたこと、および (c) SA が L2 学習の動機づけ、および L2 能力の向上においてきわめて有効であり、日本人大学生の「内向き傾向」打破のために、強く推奨されるべきプログラムであることが述べられる。